

# Fukuoka University MEDICAL SCIENCE NEWS

No. 90

編集・発行  
福岡大学医学会  
福岡大学医学部内

福岡大学医学会ニュース

## 福岡大学に感謝をこめて

福岡大学名誉学長 朔啓二郎

昭和53年に福岡大学医学部を卒業、2年間の臨床研修を修了して米国オハイオ州シンシナティ大学内科LRクリニックに4年間勤務、その後帰国して、内科学第二助手、講師、主任教授、医学部長、学長を務めさせていただきました。福岡大学の卒業生で、多分、アカデミアにおいて誰よりも恵まれていたと思います。それは、皆様の応援と、多分、明確な目標を持っていたからだと思います。チャンスはどこにでも転がっているものではなく、努力とほんの少しの運も必要だと感じています。

学長でしかできないこともあります。福岡大学の建学の精神をわかりやすく「5S」とした、建学の精神を短く英語表記できたのは最大の業績と思っています。それに従って、「5S-Way」の並木道を作り、クラウドファンディングも利用して、そこにイルミネーションを導入、大学を敷地内全面禁煙にし、カーボンニュートラルでキャンパスに芝生をいれてグリーン化した結果、キャンパスが福岡市のデートスポットになったのです。また、コロナとの戦いの4年間でしたので、「新型コロナウイルス感染症・災害等に関する行動指針」を、診療のガイドラインを参考に、レベル(学内入構基準)、クラス(授業・教育)、ステージ(課外活動)等を定めたことは、医師の発想でした。何はともあれ、西新病院の子ども病院跡地への移転、病院本館が竣工し、医学部



棟改修と多目的ホール建設が決まった事などは、私が学長でなかったら実現してなかったと思っています。様々な基金を設立できたことも大変嬉しく思っています。私は多くの大学医療人に教授、医学部長、学長を務めていただきたく思っている理由は、それぞれの立場でみる景色が異なってくるからです。仕事は人生ではありませんが、仕事は人生の一部ですので、どうぞ大切にされますよう。

私は大学の6年間、研修の2年間、帰国して38年間、約50年間を福岡大学に在籍しました。医学部心臓・血管内科学講座では、思いっきり学業を展開させる事ができました。医局員に感謝しています。現在、従業員700名ちょっとの社会医療法人の理事長をしています。大学の学長をしていた頃のやり方と全く変わりません。病院の理念を明確化して、患者さんの医療的利益を常に最優先に考え、経営を重視するやり方です。学会活動も以前と同様です。新しい年にあたって福岡大学と皆様のますますのご繁栄を祈念致します。

# 五十二年一日

## 福岡大学名誉教授 林 英之

1972年4月、18歳の折に福岡大学に新設された医学部に第一回生として入学し、1978年3月に卒業して、そのまま福岡大学医学部眼科学教室に入局し、2024年3月に70歳をもちまして福岡大学を退職いたしました。福岡大学で過ごしたのは学生6年と大学院4年、勤務42年の計52年に及びます。1回生として入学した総勢147人のうちで福岡大学に勤務して定年まで過ごしたのは、朔啓二郎元福岡大学学長と二見喜太郎元福岡大学筑紫病院外科診療教授と私の3名です。その3名のうち私が最年少でしたので、私が福岡大学で過ごした52年という年限が現在までの全教員中最長記録です。現在では定年退職の年限が70歳から65歳に早期化されていますので、この「記録」が破られることはないかと思われま

さて、大学にどれほど長くいたかなど全く無意味なことです。何を成し遂げたかにしか意義はありません。それにもかかわらず、皆様にお別れするときに、心中に去来する研究や診療、学会などのこどもは春霞のなかのように臍気で儂く、生き生きと想起されるのは大学病院旧本館、研究棟、講

義棟での日々の場面です。それは凡人が誇りうる何物も成就できなかったためかと思いますが、それを越えて思い起こされるものがあります。

入学後に新築の福岡大学病院の見学が行われ、学生は小グループに分かれて教員に引率されて院内を回りました。私のグループが一階のエレベーターホールに到着したとき引率教官曰く、「この病院は狭いし、使い勝手がわるい」。私は言うてしまいました。「先生はこれまで、ずっと広くて使い勝手の良い病院で働いてこられたのでしょうか、僕らはこの病院しか知らず、ここで働いていくことになるでしょう。ですので、そのように言われましても、困ります」。その教員は、もうおられません。またお会いできる時が、もしも来ることがあればお詫びします。「不慣れな新しい病院に移られた不安もわからずご無礼しました。でもこの病院での一生は私には楽しかったです」。



# Good-bye & Thank you

## 福岡大学名誉教授 坪井 義夫

私は1997年に福岡大学に入職し、3年間の海外留学を挟んで2003年に再度着任し、12年半の間、脳神経内科学教授としての任期を終え、無事退任の運びとなりました。在任中は医学部関係、病院関係、同門会、地域の関連病院の方々に大変お世話になりました。この間の診療、教育、研究すべてに充実感をもって勤め上げられたことはひとえに皆様のおかげと感じております。

2011年10月に脳神経内科学教授就任を拝命した際は「社会に貢献できる、そして日本のどこでも通用する臨床力を備えた脳神経内科医」の育成を理念とし、入局者の獲得、同門会の設立、地域医療機関との連携を3つの柱として新教室を立ち上げました。地域における脳神経内科疾患のかなめとして認知症疾患医療センターと福岡パーキンソン病診療センターを立ち上げ、神経疾患における院内の多職種連携チームと周辺医療機関との連携の活動を進めました。

2015年から4年間副病院長を務め、医療安全担当として院内のインシデント、アクシデントの対応において、多くの先生方、

医療スタッフとの対話を通じてお互いの職種の理解が深まりました。2020年から2つの寄付講座を開設、病院初の遠隔診療(オンライン診療)を開始しました。神経難病への取り組みとして遺伝性疾患であるPerry病に関して、日本で初めての家系報告を行い、その後原因遺伝子の発見、病理所見の報告、国際診断基準の作成すべてにおいて当教室が世界をリードしました。難病克服の願いを込めて今後も治療薬開発に向けた研究を進めます。

難病研究を含めた研究及び後輩育成において、福岡大学は私に多くチャンスを与えてくれました。新しく教室員となった27名の先生方も着実に力をつけて、個人の成長と教室の発展に頑張ってくれています。多くの方々に支えられながら充実した時間を過ごせたことを心より感謝申し上げます。皆様のご健勝とご活躍を祈念して退任のあいさつとさせていただきます。



# 退任後4年の思い

福岡大学名誉教授 大慈弥 裕之

私は、2021年3月末に31年間勤務した福岡大学を退職しました。この度、福岡大学医学会ニュースに寄稿する機会を得たので、退任後4年経った現在の思いを述べることにします。

私は1980年に本学医学部を卒業し、相模原市にある北里大学病院のレジデントとなり形成外科のトレーニングを受けました。1988年に福岡に戻り、本学の大学院生になって薬理学で学位のための研究を始めました。間もなく医学部同窓生から声がかかるようになり、形成外科医として他科の手術のお手伝いをするようになりました。1990年、整形外科初代教授の高岸直人先生が形成外科診療班を作って下さるということになったので、私は大学院を中退して整形外科の併任講師になりました。1996年には病院の診療科として形成外科が独立しました。患者は増え続けましたが、病院診療科は教職員枠が少ないため、医局のスタッフには過重な負担をかけました。2007年に形成外科が医学部講座となった時には、形成外科はやっと下積みの時代が終わったと思いました。

講座になったことで、教職員枠が増え、外部からも有能な形成外科医が集まるようになりました。学会活動も盛んになり、日本形成外科学会総会をはじめ多くの全国学会や国際学会を主催することができました。学内では、学生部委員や医療安全担当および経営担当副病院長の職を経験しました。2015年からは医療担当副学長になり、大学執行部として長年の懸案事項であった病院本館の建替決定に関わりました。他にも、博多駅クリニック、西新病院、及びななくまの杜保育園の開設に尽力しました。多忙を極めましたが、形成外科の教室は、准教授以下スタッフが支えてくれました。

福岡大学退職後、最初に直面したのは、公的研究の継続

の問題でした。私は美容医療に関する厚生労働科学研究事業（いわゆる厚労科研）の研究代表者になっていて、まだ研究は続いていました。担当官より研究機関の所属が必要と言われ、受入先を探した結果、古巣の北里大学が客員教授のポジションで受け入れてくれました。この研究は社会的インパクトも大きく、多くのメディアにも取り上げられました。福岡大学の名前を出すことができなかったことが残念です。

退職後、最もうれしかったのは形成外科学講座の次期主任教授が決まったことです。さらにうれしいことに、准教授の高木誠司先生が選任されました。これまで苦勞して築き上げてきた講座が無くなるのではないかといった不安が続いていました。医学部教授会の皆様のご理解により、二代目教授へ繋ぐことができました。新教授の下で形成外科は入局希望者も多く活気に満ち、ますます発展しています。この場を借りて感謝申し上げます。

現在、私は福岡と東京を往復しながら福岡大学や北里大学時代の仲間と楽しく仕事をしています。大学勤務の頃よりも、緊張感と開放感のバランスが良いと感じています。レジデント時代や福大形成外科の古い仲間、及び専門医取得前後の若い医局員との交流は、気持ちを前向きにしてくれます。今回、名誉教授になったお陰で、文献検索や図書館の利用も楽になりました。もうしばらく、診療と研究を楽しみたいと思っています。



## 学位取得 次の方は、福岡大学より博士（医学）を授与されました。

### 課程修了による学位取得者 [令和6年9月13日付け]

- ・永山 林太郎(病態構造系専攻)
- ・村西 謙太郎(病態機能系専攻)
- ・松本 芳子(先端医療科学系専攻)
- ・福本 博順(病態構造系専攻)
- ・清水 真行(病態機能系専攻)
- ・倉員 真理子(先端医療科学系専攻)

### 論文提出による学位取得者 [令和6年10月3日付け]

- ・サニヤインプル プラカシット(病態構造系専攻)
- ・小林 彩加(病態構造系専攻)
- ・古井 雅人(病態機能系専攻)
- ・田尻 崇人(病態構造系専攻)
- ・鈴木 脩司(病態構造系専攻)
- ・久保田 慧(先端医療科学系専攻)
- ・上野 智弘(病態構造系専攻)
- ・藤田 秀昭(病態構造系専攻)
- ・平田 哲夫(先端医療科学系専攻)

# 新風

令和6年10月1日付で  
本学へ赴任、昇格された方に  
自己紹介をしていただきました。

## new phase



脳神経外科学  
准教授  
竹本 光一郎

**安**部 洋 教授のご推挙により令和6年10月1日付で、福岡大学医学部脳神経外科 准教授を拝命いたしました。私は平成15年に福岡大学を卒業、同年脳神経外科教室に入局し、福大病院、九州医療センターで脳血管内治療の修練を積みました。平成23年からの2年間は京都大学・カルフォルニア大学ロサンゼルス校へ学外留学の機会をいただき、最先端の脳カテーテル治療を学ばせていただきました。帰国後10年間は、長崎県で脳外科全般の包括的地域医療に従事して参りました。令和4年に帰学し、脳動脈瘤、脳腫瘍、脳シャント疾患、虚血性脳血管障害のカテーテル治療に専従し、部門のチーフとして後輩指導・医学生教育に取り組んでいます。脳血管内治療は過去20年間に飛躍的進歩を遂げ、脳神経外科の主要部門となりました。高度に専門化する一方、グローバルな視点で本質を見据えた診療が重要と考えています。外科チーム・血管内チームの二人三脚で「安全で確実な治療」をモットーにバランスの良い医療が提供できるよう尽力したいと思います。最後に、本年より福大病院に脳卒中センターが新設されます。今日の脳卒中診療においては、当科および脳神経内科での「迅速な診断治療」に始まり、「急性期リハビリと栄養管理」、ソーシャルワーカーを中心とした「社会復帰に向けての支援」まで、シームレスケアが重要であり、看護部・リハビリテーション部・薬剤部・栄養部など多部署の強力な連携が不可欠です。各診療科の先生方におかれましては、患者さんの事など相談させて頂くことも多いかと存じます。何卒、ご指導ご鞭撻宜しくお願い致します。



看護学科  
准教授  
松本 祐佳里

**令**和6年10月より福岡大学医学部看護学科発達看護分野小児看護学の准教授を拝命いたしました。私は、福岡大学病院で看護師として勤務した後、高知女子大学(現高知県立大学)大学院で看護学修士を取得しました。大学院修了後は、再び福岡大学病院に戻り、小児看護専門看護師の資格を取得し、福岡市児童虐待専門コーディネーターや小児等在宅医療推進事業などを担当させていただきました。臨床では、小児科病棟だけでなく、救急救命センターに入院する子どもや家族への支援にも携わってきました。常に子どもにとって最も良いことは何かを考えながら、日々過ごしてまいりました。平成30年より福岡大学医学部看護学科小児看護学の講師に着任し、小児看護や家族看護を担当しております。研究では、医療的ケア児の災害対策をテーマとして、災害への備えや支援体制の構築に向けた取り組みを行っております。

これらの経験を活かして、福岡大学の発展に貢献できるよう尽力して参ります。引き続きご指導賜りますよう、よろしくお願い申し上げます。



リハビリテーション部  
准教授  
藤見 幹太

**令**和6年10月より福岡大学病院リハビリテーション部准教授を拝命致しました、藤見幹太と申します。私は平成7年に福岡大学医学部を卒業し、同年に当時荒川規矩雄教授の下、福岡大学医学部第二内科(現在の心臓・血管内科)へ入局致しました。その後、平成17年に福岡大学大学院博士課程を修了し、福岡大学筑紫病院、白十字病院、唐津赤十字病院と主に臨床の現場で従事しておりました。平成20年に福岡大学病院新診療棟が完成するタイミングで福岡大学病院に戻り、当時の教授の朔啓二郎先生の元で心臓リハビリテーション診療を開始しました。平成28年よりリハビリテーション部講師、令和4年心臓リハビリテーションセンター診療教授を経て、今回福岡大学病院リハビリテーション部准教授を拝命致しました。

現在、心臓リハビリテーションセンターを中心に患者様の治療、臨床研究に取り組んでおります。心臓リハビリテーションは

多職種が協働して関わっていくプログラムであり、運動療法、栄養指導、心理カウンセリングといった全人的なケアを行っています。今後の医療は医師だけで成立するものではなく、多職種協働が不可欠になる時代です。心臓リハビリテーションセンターが患者さまのお役に立てるよう、また多くのスタッフが働きがいのある職場であり続けられるよう努力していく所存です。

まだまだ道なかばではありますが、今後ともご指導ご鞭撻のほどを宜しくお願い致します。



衛生・公衆衛生学  
講師

阿部真紀子

**令**和6年10月1日付で福岡大学医学部衛生・公衆衛生学の講師を拝命いたしました。私は平成22年に福岡大学医学部を卒業し、九州大学第三内科内分泌研究室に入局しました。国立病院機構東医療センター、国立病院機構九州医療センターで内分泌・糖尿病内科診療に従事した後、九州大学大学院予防医学博士課程にて疫学・統計学の基礎からがんゲ

ノム疫学に至るまでご指導いただきました。学位取得後は愛知県がんセンター研究所の研修生として恩師のもと、がん疫学研究を続けました。その後、夫の海外留学を機に現地の公衆衛生大学院に通うことを決め、令和2年にオーストラリアのグリフィス大学にてMaster of Public Healthを取得しました。帰国後、令和3年4月より福岡大学医学部衛生・公衆衛生学教室に勤務する機会をいただき、現在に至ります。

世界の死因の大部分を占める非感染性疾患を予防するには、診療科を超えた多角的なアプローチが必要となります。私がこれまでに得た疫学・公衆衛生学的視点からこの活動に貢献できるよう努めます。また、後進の指導にも力を入れ福岡大学の発展に寄与したいと思っております。今後ともご指導賜りますようお願い申し上げます。



脳神経外科  
講師

小林 広昌

**安**部洋教授のご推挙により、2024年10月1日付けで福岡大学医学部脳神経外科講師を拝命いたしました。私は

## 福岡大学医学会第91回例会

■日時/令和7年2月19日(水) 18:00～18:50 ■場所/医学部 RI 講義棟 3階 大講堂

### 【進行】集会幹事 濱崎 慎

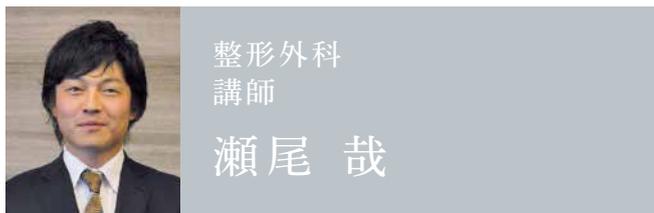
- 1) **開会の辞** 集会幹事 濱崎 慎
- 2) **会長挨拶** 医学部長 小玉 正太
- 3) **新任講演** (講演25分、質疑応答5分)  
講演者…安部 洋(脳神経外科学 教授) 座長…小玉 正太  
「脳神経外科の発展と今後の課題」
- 4) **福岡大学医学紀要51巻 優秀論文賞授与式**  
👑 受賞者…平川 豊文 (産科婦人科学)  
**医学生業績報告書「JAMeS」優秀賞授与式**  
👑 井上 悠太郎  
「心血管疾患術後患者の早期離床と握力との関係—JAMeS 7(1):43-45, 2024」
- 5) **受賞論文の要旨講演** (講演10分、質疑応答含む)  
講演者…平川 豊文 座長…四元 房典  
「Adipose-derived Mesenchymal Stem Cells Regenerate Thin Endometrium and Restore Fertility」
- 6) **閉会の辞** 集会幹事 濱崎 慎



講演された先生方と  
(左から、四元先生、平川先生、井上さん、小玉会長、安部先生)

2009年に福岡大学医学部を卒業し、初期研修を経て2011年に同大の脳神経外科に入局いたしました。入局後は井上亨前教授にご指導賜り、2018年に福岡大学脳腫瘍学講座で鍋島一樹前教授、濱崎慎教授のご指導の元、「肺腺癌の転移性脳腫瘍における臨床病理学的、遺伝子学的特徴と予後因子」で学位を取得いたしました。学位取得後は、福岡大学病院で臨床経験を積ませていただきました。

専門領域は、脳血管障害の直達手術、特に他院で治療困難な高難度脳動脈瘤、脳動静脈奇形・もやもや病などの希少疾患、バイパス手術を得意とし、その他にも頭蓋底腫瘍、顔面痙攣や三叉神経痛に対する機能手術、小児手術を専門としております。脳神経外科領域ではカテーテルを用いた血管内治療、神経内視鏡手術と低侵襲化が進んでまいりまして、開頭手術においても低侵襲化が期待されています。福岡大学では独自に低侵襲の開頭手術を開発、発表すると同時に、血管内治療とのHybrid治療にも積極的に取り組んでいます。また2024年よりスタンフォード大学脳神経外科 NEUROTRAIN Centerへ留学し、微小解剖の理解を深め、新たな頭蓋底手術アプローチの研究を行ってまいりました。脳神経外科手術は、患者さんの人生の中でとても大きな出来事であるため、患者さんにとっての最後の砦となる思いで、責任を持って診療にあたらせていただきます。また教育の面では、母校である福岡大学の人材育成に貢献すべく、精進していく所存です。今後ともご指導賜りますよう、よろしくお願い申し上げます。



整形外科  
講師

瀬尾 哉

令和6年10月1日より山本卓明教授のご推挙により、福岡大学病院整形外科講師を拝命いたしました。私は平成20年に福岡大学医学部を卒業し、初期臨床研修を終了後、平成22年に福岡大学医学部整形外科学教室へ入局しました。平成25年からは大学院へ入学し、前主任教授内藤正俊先生が考案された寛骨臼回転骨切術や人工股関節置換術に関する研究などに携わらせていただきました。令和2年4月から整形外科助教に着任し、現在まで股関節・小児整形を担当しております。

これまで培ってきた経験を活かし、福岡大学並びに地域医療の発展のために尽力して参ります。今後ともご指導ご鞭撻のほど宜しくお願い申し上げます。



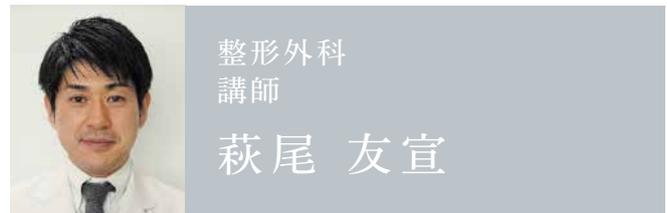
整形外科  
講師

中山 鎮秀

この度、山本卓明教授のご推挙により福岡大学病院整形外科講師を拝命致しました中山鎮秀と申します。私は平成20年に神戸大学を卒業、平成22年に九州大学病院臨床・腫瘍外科に入局、関連病院研修を経た後、平成28年より福岡大学病院整形外科に在籍致しております。

外科医として8年間学んだ腫瘍学を活かせるようお取り計らい頂き、整形外科領域の腫瘍(骨軟部腫瘍)を専門に診療を行っています。骨軟部腫瘍は頭部から足までの様々な部位に発生し、組織型もWHO分類で300種類以上に区分される多様性のある腫瘍群です。また、一つ一つの腫瘍が希少であることも相まって診断、治療に難渋することも稀ではありません。当院では診療科の垣根が低く、診断から治療に至るまで様々な科の先生方とのスムーズな連携が可能という特徴があり、地域の先生方から多くの患者様をご紹介頂き診療を行っています。

福岡大学病院の発展にわずかでも貢献できるように精進したいと思っておりますので、今後ともご指導ご鞭撻のほど宜しくお願い申し上げます。



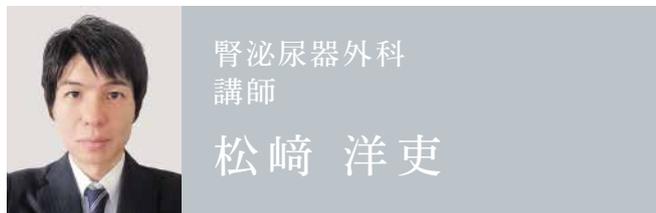
整形外科  
講師

萩尾 友宣

この度、山本卓明教授のご推挙により、令和6年10月1日付で福岡大学病院整形外科講師を拝命いたしました。

私は、平成18年に獨協医科大学医学部を卒業し、福岡大学病院で初期研修を行ったのち、平成20年に福岡大学医学部整形外科学教室に入局いたしました。その後、平成23年より大学院に進学し、寛骨臼形成不全に関する臨床研究を行い、学位を取得いたしました。平成28年には福岡大学病院整形外科助教に着任し、現在に至るまで足の外科および関節リウマチの診療を担当しております。近年、少子高齢化の進行に伴い、腰痛や関節痛、骨折、骨粗鬆症、関節リウマチなどを抱える患者さんは増加の一途をたどっています。運動器の機能低下は生活の質を大きく左右するため、整形外科の果たす役割はますます重要となっています。このような状況の中、足部・足関節疾患に対する関節鏡を用いた低侵襲手術を積極的に導入するとともに、

臨床研究にも注力し、診療の発展に努めてまいりました。これまでの経験を活かし、今後も臨床・研究・教育に尽力し、福岡大学病院の発展と患者さんの健康維持・向上に貢献してまいります。何卒ご指導、ご鞭撻のほどよろしくお願い申し上げます。



腎泌尿器外科  
講師

松崎 洋吏

羽 賀宣博教授のご推挙により、令和6年10月付で福岡大学医学部腎泌尿器外科学講座の講師を拝命致しました。私は2004年に福岡大学を卒業後、臨床研修を経て、2006年に福岡大学医学部泌尿器科教室へ入局しました。入局後は3年間の関連施設での部外修練以外は福岡大学病院での診療に従事し、2011年から福岡大学医学部細胞生物学教室(白澤専二教授)にて基礎研究に携わらせていただきました。泌尿器科診療に目を向けますと、手術はロボット支援手術に移り変わり、より低侵襲で高度な医療が提供できるようになりました。薬物治療においても特にこの10年での変遷は非常に目まぐるしく、前立腺癌、腎癌、尿路上皮癌は次々と新規薬剤が登場し、奏効率の高い治療を患者様に提供できるようになりました。新病院となりDaVinci Xi 3台に加え、国産ロボットであるhinotoriまで導入され、福岡大学は高度医療を担う泌尿器科医としての研鑽ならびに育成を行うには非常に恵まれた環境にあると思います。今回このような責任のある役職をいただき、大変身の引き締まる思いとともに、福岡大学の発展への貢献ならびに後輩の育成にも力を入れたいと考えております。今後ともご指導ご鞭撻の程、お願い申し上げます。



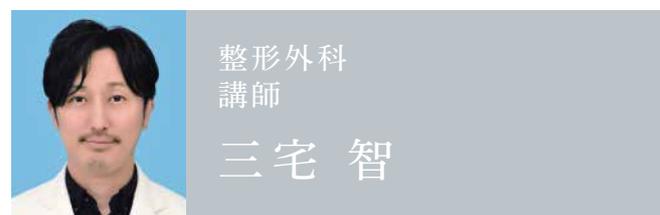
整形外科  
講師

松永 大樹

こ の度、山本卓明教授のご推挙により、2024年10月1日付けで福岡大学病院整形外科講師を拝命いたしました。2010年3月に福岡大学医学部を卒業し、2012年4月より整形外科教室に所属、大学病院、関連病院を経て、山本教授のもとで学位も取得させて頂きました。専門分野は膝関節、股関節疾患であり、スポーツ障害や変性疾患などの治療に携わっております。

人工関節置換術や骨温存手術である骨切り術、靭帯再建術など多岐の手術を経験させて頂いております。福岡大学中心にスポーツ障害で受診されることも多く、競技復帰に向けた治療を行えるよう心がけております。また、人工膝関節置換術ではロボット支援下手術も導入されており、術後成績向上に向けて研究・治療を続けてまいります。

これからも患者さん一人一人に合った最適な医療をご提供できるよう努め、また、臨床・研究・教育など福岡大学の発展に微力ながら尽力していきます。今後ともご指導賜りますよう、何卒よろしくお願い申し上げます。



整形外科  
講師

三宅 智

こ の度、山本卓明教授のご推挙により2024年10月に福岡大学病院整形外科講師を拝命いたしました。私は2007年3月に福岡大学医学部を卒業し、2009年4月に福岡大学医学部整形外科教室に入局いたしました。福岡大学病院および関連病院で、整形外科および外傷の基礎を学びました。福岡大学大学院では内藤正俊教授(当時)、伊崎輝昌准教授(当時)の元で、臨床研究と肩関節分野の基礎を学びました。2017年4月助教に着任以降、現在まで肩・肘関節分野を中心に担当してきました。臨床面では、関節鏡視下手術、人工肩関節手術などによってスポーツ選手から高齢者まで幅広い年齢層の患者さんに対応してきました。肩・肘関節分野の手術症例数は国内有数です。臨床成績をよりよくするための臨床研究も積極的に行ってきました。

自分の目標は、患者さんに「この病院に来てよかった」と安心・満足してもらふことと、周囲の医療機関から「あの病院に相談(紹介)してよかった」と信頼してもらふことです。それを達成するためには、レベルの高い技術や研究に対する向上心や患者さんやスタッフへの思いやりが必須だと思います。またそれらを継承していくための後進の育成も重要だと思います。整形外科の講師として、微力ながら福岡大学医学部・病院の発展に尽力いたします。今後ともご指導ご鞭撻のほどよろしくお願いいたします。



筑紫病院 救急・総合診療科  
講師

川野 恭雅

このたび、仲村佳彦教授のご推挙を賜り、令和6年10月1日付で福岡大学筑紫病院救急・総合診療科講師を拝命いたしました。

私は、平成19年に福岡大学医学部を卒業後、福岡大学筑紫病院にて初期臨床研修を行い、平成21年に福岡大学病院救命救急センターへ入局いたしました。入局後は、福岡大学病院をはじめとする関連病院において、軽症から重症患者まで幅広い救急診療と集中治療の基礎を学び、その間、重症循環不全や重症呼吸不全に対するECMOを用いた集中治療に注力してまいりました。

また、同時期に講師であった仲村先生の熱心なご指導のもと、多忙な臨床診療においても、小さな気づきや疑問を大切に

し、臨床研究を通じて真理を追究することの重要性和楽しさを学ぶ機会をいただきました。その成果として、令和元年に学位を取得いたしました。

今後も、集中治療領域における治療成績向上に資する研究を継続するとともに、微力ながら福岡大学のさらなる発展に尽力してまいります。引き続きご指導・ご鞭撻を賜りますよう、よろしくお願い申し上げます。

## 第51回 医学部慰霊祭

第51回福岡大学医学部解剖体慰霊祭は、ご遺族並びにご来賓の方々、本学教職員と学生約350名が参列し、令和6年10月19日(土)午後2時から福岡斎場において厳粛に執り行われました。

今回祀られた霊位は、学生の医学教育の目的で、系統解剖のために献体された28柱、病院で死去されて病因究明のために病理解剖を御承諾頂いた14柱、合わせて42柱でした。

献灯献花の後、厳粛な雰囲気につつまれて慰霊祭は進行し、小玉正太医学部長は祭詞の中で、医学の発展のために欠くことのできない解剖にご献体頂いた霊位とご遺族、さらに、ご協力を頂いた各種関係機関に敬意と謝意を表されるとともに『私どもは、日々花を供え、香をたいて42柱の科学に対する貴きご献身を偲び、敬意と感謝の念を表していますが、本日、ここに一堂に会し、皆様方の崇高

な御遺志を今一度思い起こして、今後益々、勉学、研究に励み、人類の幸福と福祉に貢献できますよう努力することをお誓いいたします』と新たな誓いを披瀝しました。



教室だより

Letter from a classroom



## 耳鼻咽喉・頭頸部外科

耳鼻咽喉科は聴覚・平衡覚・嗅覚・味覚のほか、呼吸・嚥下・音声言語など、生きていくための重要な感覚器や運動器を取り扱う診療科であると同時に、顔面・頭部・頸部領域の悪性腫瘍を扱う主たる診療科でもあります。われわれの基幹学会である日本耳鼻咽喉科学会は、2021年より日本耳鼻咽喉科頭頸部外科学会へと名称を変更しました。本邦で明治25年から続いてきた耳鼻咽喉科という名称に、頭頸部外科を付加したことには理由があります。以前から、頭頸部に発生した悪性腫瘍の患者さんが耳鼻咽喉科ではなく他の外科系診療科を受診し不利益が生じた事例、あるいは生じかねない事例が知られていました。耳鼻咽喉科という名称だけでは、頭頸部癌をはじめとする頭頸部外科診療への取り組みが反映されないこと、既に欧米の先進国ではOtolaryngology-Head and Neck Surgeryを名乗っていることから、名称変更に至りました。そこで2025年4月より、福岡大学病院の診療科名を耳鼻咽喉・頭頸部外科へと変更することになりました。ちなみに医学部の講座名は耳鼻咽喉科学教室のままで、医学部医学科のカリキュラムでは、耳鼻咽喉科と歯科口腔外科とで頭頸科という名称を用いています。

さて、いささか前置きが長くなってしまいました。名称は変わりましたが、病院業務は以前からと何ら変わりありません。真珠腫性中耳炎や慢性中耳炎などの耳疾患、鼻炎や副鼻腔炎などの鼻疾患については、顕微鏡や内視鏡・外視鏡を用いた精度の高い手術治療を実践しています。耳管開放症に対する耳管ピン手術は認可施設が少ないため、九州各県から患者さんが紹介受診されます。重度

難聴の患者さんには高度先進医療である人工内耳手術を行っており、小児難聴の場合には聴覚特別支援学校、福岡市立心身障がい福祉センターなどと連携して聴能訓練を実施しています。また最近では聴力検査では正常なのに難聴を自覚する“聞き取り困難症”と呼ばれる患者さんが増え、新たな検査を導入、開発しています。喉頭がん・上顎がん・咽頭癌・耳下腺がん・甲状腺がんなど、頭頸部領域の悪性腫瘍については、放射線科・形成外科・歯科口腔外科・消化器外科などと連携し、QOLに配慮した治療を行っています。研究としては医局開設以来、耳鳴りや聴覚過敏といった聴覚に関するものや、頭頸部癌の治療に関する臨床研究を中心としています。医局は未来を担う若者で活気があり、彼らは積極的に新しい医療を学びながら来るべき時代に備えています。今後とも耳鼻咽喉・頭頸部外科をよろしくご願ひ致します。



耳鼻咽喉科学教室



耳鼻咽喉・頭頸部外科

(写真は2024年12月の福岡県地方部会にて研究奨励賞を獲得した際の記念写真。当院の言語聴覚士と関連病院に  
出向中の医局員と共に。)



教室だより  
Letter from a classroom



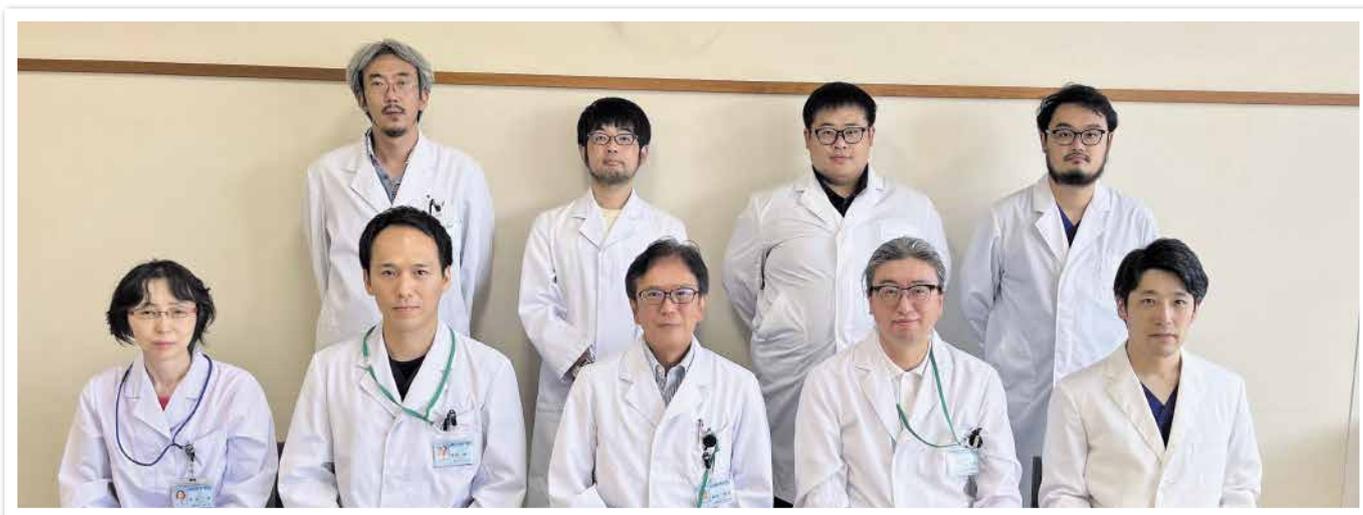
## 微生物・免疫学講座

微生物・免疫学講座は永山在明主任教授の下、微生物学講座と寄生虫学講座が統合する形で平成15年4月に発足しました。その後、平成18年4月より廣松賢治主任教授に引き継がれ現在に至ります。当講座では、広く免疫学、微生物学、寄生虫学における研究・教育を行なっております。教育においては主にM2の免疫学、寄生虫学、微生物学の講義・実習を担当しております。ここ数年は、研究室配属で当教室を選択した学生や、M2の学生などが継続的に学習や研究のために教室を訪れており、研究や学会発表を行うなど積極的に活動しております。

研究においては、主に細胞内寄生性病原体を中心に病原体と宿主の相互関係や免疫応答に着目して解析を行なっています。特に近年は、宿主の免疫応答に係る細胞内代謝の適応(イムノメタボリズム)、動脈硬化の主要な原因となるクラミジアの遷延性感染の機序等、脂肪組織における病原体の感染と宿主の反応に着目し、感染によるイムノメタボリズムの変化について研究を進めています。研究対象は肺炎クラミジアや性器クラミジアなどの偏性細胞内寄生細菌にとどまらず、*Mycobacterium abscessus*などの抗酸菌やクレブシエラなどの一般細菌、スピロヘータであるレプトスピラといった細菌、クルーズトリパノソーマのような細胞内寄生性原虫など幅広い病原体を扱って研究を進めております。

また、臨床分野への貢献として、臨床側からの要請に応じて寄生虫症疑い症例の診断支援や、検査室で同定が困難であった微生物の遺伝子解析の支援なども行なっております。特に、2020年の新型コロナウイルスの世界的な流行期には、本邦における流行初期のPCR検査体制が十分でない時期より、再生・移植医学講座と連携して、いち早く福岡大学病院での検査体制の立ち上げを行い、病院検査部での検査実施への引き継ぎを行いました。また、総合診療学講座との共同研究では新型コロナウイルスワクチンに対する免疫抗体反応についての臨床研究を行い、複数の報告を致しました。この研究には多数の福岡大学病院関係者の方々にご協力をいただきました。この場をお借りしてあらためて感謝申し上げます。

今後も様々な新興・再興感染症が流行する可能性があります。また、悪性腫瘍や自己免疫疾患等の治療などに新規の抗体薬などが次々と導入されるなど、免疫学に対する知識もより重要なものとなってきております。それに応じて、普段は想定されないような日和見病原体による感染症が増えることも予想されます。当講座では、引き続き免疫学・微生物学・寄生虫学・感染症学の研究・教育に邁進してまいります。また、学生教育を通じて人材の育成にも尽力してまいりますので、今後ともご指導・ご支援をどうぞよろしくお願い致します。(文責 吉村芳修)



長い間ありがとうございました

令和6年10月1日～令和7年2月28日までに退職された方

■ 古賀 文二 講師 (皮膚科学)

■ 田中 潤 講師 (整形外科)

以上、令和6年10月31日付け

以上、令和6年12月31日付け